

魚ノ棚通



車町・小田原町・西魚町・東魚町が属していた筋です。魚ノ棚という正式な町名はなく、この通りの両側に魚屋・料理屋が多かったことから俗称の筋名ができました。元禄年間(1688～1704)に小田原町に初めて料亭を開いた河内屋文左衛門、納屋仁右衛門ら格式のある料亭がありました。

河内屋文左衛門「河内屋文左衛門」(名古屋市博物館蔵)

杉ノ町通



西万町・東万町・研屋町・梅枝町が属していた筋です。江戸期、堀川端から高岳院門前まで伸びる東西の道筋は、杉ノ町筋と呼ばれていました。沿道の金剛寺門前の山林にあった杉の太木から、あるいは、富士権現社(現在の富士神社)境内の老杉からその名がついたと伝えられています。

金剛寺門前「金剛寺門前」(名古屋市博物館蔵)

桜通



西菅原町・菅原町・桜町・東桜町が属していた筋です。筋名のもとになっている桜町の由来は、桜天満宮(現在の桜天神社)の境内に桜の大樹があったことによると言われています。昭和12年(1937)の汎太平洋平和博覧会の開催を控え、桜町は、その多くを拡張道路として提供し、現在の桜通となりました。

桜天満宮「桜天満宮」(名古屋市博物館蔵)

伝馬町通



伝馬町・宮町・神楽町が属していた筋です。伝馬町は清須から移された町名です。本町通との交差点に高札場が置かれ、「札の辻」と呼ばれました。筋の東は飯田街道(駿河街道)、北は下街道と結ばれていました。この筋には交通の要衝らしく、伝馬問屋、飛脚問屋のほか、下駄屋などが建ち並んでいました。

伝馬町「伝馬町」(名古屋市博物館蔵)

歴史の十字路 まちしるべ



京町通



和泉町・茶屋町・京町・中市場町が属していた筋です。京町は清須から移された町名で、京都から呉服物などを扱う商人が移り住んだことが由来です。安政2年(1855)の大火後、薬種問屋街に発展しました。茶屋町には、尾州茶屋家や伊藤次郎左衛門家(のちの松坂屋)など名門・富家が並んでいました。

尾州茶屋家「尾州茶屋家」(名古屋市博物館蔵)



広小路通



広小路通・栄町が属していた筋です。万治3年(1660)の大火後、長者町から久屋町までの間を拡張、広小路の名が起りました。明治に入ると拡張延伸され、笹島から久屋町の旧駅前に全国2番目の路面電車が開通しました。かつて「広ブラ」が流行した賑わい空間は、昔も今も名古屋の中心です。

広小路「広小路」(名古屋市博物館蔵)

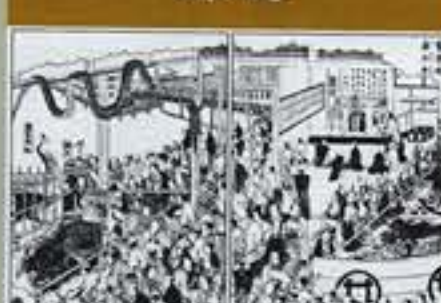
本重町通



本重町・東本重町が属していた筋です。本重町は清須では新町と呼んでいました。新町に住んでいた打物鍛冶師が、夢のお告げに従って精魂込めて鍛えた刀に鶴重と路を入れるようになり、新町は鶴重町と呼ばれるようになりましたが、五代將軍徳川綱吉の養女鶴姫の名を避けて、本重町と改められました。

本重町「本重町」(名古屋市博物館蔵)

錦通



園井町・蒲焼町が属していた筋で、「蒲焼町筋」と呼ばれていました。蒲焼町の由来は、もとの地名である香倍焼町がつづまったとか、城普請で集まってきた人々を相手に蒲焼店が多かったとかいう諸説あります。この通りは、戦後に都市高速鉄道(地下鉄東山線)用地として拡張され、昭和41年(1966)「錦通」と改称されました。

錦通「錦通」(名古屋市博物館蔵)

袋町通



袋町・東袋町・宝町が属していた筋です。筋名の袋町は清須の本町小塚袋ノ内から移転した町で、町名は旧名を用いました。本来地理的にはここが伝馬役を担う筋でしたが、西の山林が障害となって、一筋北に移されました。この町には福生院があります。戦後は活気のある繊維の街に変貌していきました。

袋町「袋町」(名古屋市博物館蔵)

歴史の十字路まちしるべ



伏見通



伏見町・伊合町が属していた通りです。名古屋開府のころ山城国伏見より伏見屋六兵衛という者が移り住んでその名がついたと言われています。伏見町には甘い香りを放つことで評判の白牡丹が植えられた屋敷がありました。また、張振甫という名医が住み、多くの人がこぞって押し寄せたと書かれています。

長島町通



長島町・島田町が属していた通りです。長島町は清須から移されてきた町です。清須では伊勢の国長島の人々が多く住んでいたと伝えられています。長島町(現在の東照宮の地)には明倫堂と言う藩の学校があり、初代総裁の細井平洲(現在の東海市出身)の講義は高い評判を呼びました。

本町通



本町通は城下町を南北に貫く甚盛割の中心の大通りでした。本町は旧名です。この町には旧家の富商が軒を並べていました。昭和三年(一九二八)に昭和天皇が名古屋に行幸になった際、お通りになったことから、翌年、町名は御幸本町通と改められました。ガスの灯の設置、水道の敷設、道路の舗装はいずれも本町通が最初でした。

久屋大通



久屋町と問屋治町。小市場町を含んだ広大な通りで、戦後の復興計画で若宮大通とともにつくられた。いわゆる百メートル道路。通りの名になっている久屋町は、はじめ千物(ひもの)町と呼ばれていました。初代尾張藩主徳川義直がこの町を通行した際に、末代まで繁盛すべき所であるといひ、ただちに久屋町と名づけたと言われています。

大津通



大津町・朝日町が属していた通りです。大津町は山城国大津の住人四郎左衛門が移り住んだことから名づけられ、清須から移されました。西に薬師問屋街京町があるから、大津町には医者が多く住み、江戸時代には外科医名東宗之、産婦人科医奈倉道伯、明治・昭和にかけては私立好生館病院の北川家・佐藤家が有名でした。

伊勢町通



伊勢町・鶴重町が属していた通りです。清須の神明町北松原辺りにあった伊勢町が移ってきました。清須では神明町を伊勢町と呼んでいたようです。大正時代、現在の名城小学校の敷地の一部に辰野金吾設計の名古屋国技館(八千八百人収容)が建てられ、相撲や演説会、サーカス等が行われました。

呉服町通



呉服町・針屋町が属していた通りです。呉服町は清須から移された町名です。町名の由来は、清須において町内の富家七軒が初めて三階建ての家を建てたことによると言われています。七間町と言えは、かつて東照宮祭礼の橋舟慶のからくり人形山車(だし)で有名でした。

御園通



上園町・下園町が属していた通りです。通り名の御園町は、清須で御園野神明があった御園野(みそのの)町が移りました。その後、御園町と改められました。大正の初め、この地を訪れた日本画家の輪本清方(かたはらきよかた)は、朝夕、屋根神様を仰いで通る町の人々を見て、名古屋の町人の心がまえがゆかしかったと「祝ひかたの記」に書いています。

桑名町通



桑名町・桶屋町が属していた通りです。桑名町は清須にあった北市場桑名町が移った町で、芭蕉の「冬の日」を編集した中心人物の山本荷分(やまもとのかい)は、蕉門の十哲(芭蕉門下の優れた十人の弟子)のひとつである越智越人(こしえ)が住んでいました。もともとは伊勢の国桑名の人々が多く住んでいたと伝えられています。

長者町通



上長者町・下長者町が属していた通りです。清須では富豪が集まり住んでいたことから長者町と呼ばれ、それが移されたと言われています。明治に入り西洋料理店などが並び、歓楽街になっていきましたが、戦後はバラックで商いをする店が増え、食糧や衣料などの現金問屋が集積し、それが繊維問屋街の基礎となりました。

七間町通



七間町・富沢町が属していた通りです。七間町は清須から移された町名です。町名の由来は、清須において町内の富家七軒が初めて三階建ての家を建てたことによると言われています。七間町と言えは、かつて東照宮祭礼の橋舟慶のからくり人形山車(だし)で有名でした。